

久しぶりに池袋ジュンク堂書店へ

—「いま、天皇制を問いなおす本」コーナーに寄る—

児童文学者のきどりのりこさんからの年賀状に、季刊誌『前夜』の最新10号の「いま、天皇制を問いなおす本」というアンケートで、旧拙著『短歌と天皇制』（風媒社 1988年）をあげてくださった由、書き添えてあった。実は、その季刊雑誌の名も知らなかったのので、インターネットで調べてみる。「NPO 前夜」が3年間12号を目処に発行する「文化・芸術・思想一領域を横断する批評」雑誌で、賛同会員や定期購読者に支えられているらしい。編集委員には高橋哲哉、中西新太郎、三宅晶子、徐京植さんらの名前が見える。10号の特集は「靖国・教育・天皇制」とあるので、ともかくネットで注文、入手した。アンケート「いま、天皇制を問いなおす本」には、天皇制に関心が深いと思われる70人近い識者たちが3冊を挙げ、コメントを付している。きどさんは、渡辺清『砕かれた神』と横田耕一『憲法と天皇制』とともにあげてくださり、拙著には次のようなコメントがなされていた。ちなみに、きどさんは、けっして自分からはおっしゃらないのだが、与謝野晶子の娘の宇智子さんを母親とする、晶子のお孫さんなのである。

『短歌と天皇制』は、歌人でもある著者が、戦時下の翼賛体制にいと易々と取り込まれていった歌人たちの責任を問い、また「歌会始」を資料的にも綿密に検証し、あわせて今も天皇制に取りこまれている現代短歌界の問題を指摘する好著

アンケートを読み進めると、これまで私も当然読んでいなければならない基本書も多数あげられており、耳が痛いところもあった。ああ、時間との勝負だな、とも思う。また、朝日新聞記者出身で、天皇制に関するドキュメントを多数書かれている、ノンフィクションライター田中伸尚さんも、3冊とは別にコメントの中で『短歌と天皇制』は歌人がいとも簡単に体制に取り込まれていく実相を、短歌と天皇制のかかわりを通して、「歌会始」を中心に鮮やかに切開いた素晴らしい本です」とあった。

二人のコメントにはやや面映い思いが先に立つが、その拙著以降も私が繰り返し取り組んでいる主題をズバリと指摘くださっているのは、大きな励みにもなり、ありがたいことだった。刊行後20年も経とうというのに、「天皇制をといなおす本」として取り上げてくださる人がいるなんて。アンケートに登場した200数十冊を中心に、池袋のジュンク堂でコーナーを特設しているという。入手しにくかった本も買えるかもしれないと、東京に出たついでにジュンク堂に立ち寄った。手に取った本が座って読めるスペースをふんだんに確保しているところが気に入っている本屋さんで、時折、ファックスで注文し、届けてもらっている本屋さんでもある。池袋西口に実家のある私には子どものころから馴染みのある芳林堂書店の方に立ちることが多かったのだが、残念なことに数年前に閉店してしまった。

1階の案内係に、特設コーナーのことを聞いてもわからなかったのだが、ともかく人文系の4階にあがると、すぐにそのコーナーはあった。背表紙ではなくて表紙をも見せる、その展示を見渡したが、新刊が中心なのか、やっぱり私の本は見つからなかった。少々残念ではあったが、気を取り直して、雑誌の旧号と文庫本を購入。詩歌関係の棚へ行って、拙著『現代短歌と天皇制』と阿木津英さんたちとの共著『扉を開く女たち』を確認した後、ぶらぶら歩きに疲れてしまったのか、売り場の椅子が役に立つ。今日は西武の地下で何を買っていこうか、と立ち上がるのだった。

(2007年2月1日)